

### 3.5 固有名詞の言語学および意味的成立機序の考察<sup>1</sup>

前節まで、地名人名は固有名詞に含まれるという観点から、全失語症者の人名と地名の良好性を考えてきた。しかし、文献参照中、固有名詞の性質をよく把握していないと思われる記述に遭遇することも多かった。筆者の経験からでも、一般名詞に比較しての固有名詞の独自性を把握することは、必ずしも容易ではなかった。そこで、本節では固有名詞と一般名詞の言語学的、意味的相違について、それらがより明確になるよう考察する。

固有名詞と特定対象の関係が成立するには、それに先立ってあるカテゴリーの中から、特定物が区別され記憶されなければならない。同じカテゴリーの中から特定の個を見分け、記憶する能力は人間に限られたことではない。例えば、鳥は何千羽もいるヒナの中から、鳴き声で自分のヒナを区別し、戻ってくる (Müller & Kutas, 1996)。さらに、驚くべきことに、spider monkeys は特定の相手に連絡しようとする時発声をするが、同じ群れの仲間は“誰が誰に向かって声を出しているか認識することができる (Masataka, 1986)。このような声かけは、人間がある人物を呼ぶとき使う固有名詞、具体的には人名と同様の機能を持っていると思われる。このように、固有名詞は特定物を対象とした具体的な記号であり、人間以外の動物でも使われている可能性がある。

固有名詞は、文法的には名詞として分類されている。しかし、一般名詞のもつ意味と、固有名詞が指し示すものとの違いは峻別されるべきである。“一般名詞”とはある集合を包括的に表すカテゴリー名である。こ

---

<sup>1</sup> 本節は、次の論文をもとにした： Kiyoshi Yasuda et al., Brain processing of Proper names, *Aphasiology*, 14, (11), 1067-1089, 2000.

これは、その集合内の対象物に、おなじ意味が割り当てられていることを示している。反対に、“固有名詞”はある集合内の、特定の人物や物に対しての名前や記号である。これは商品に貼り付けた Label のように、その対象を直接的に参照することを担っている。この点において、固有名詞は意味をもたないということになる。これは the theory of direct reference として知られている固有名詞論である (Valentine et al., 1996 参照)。多くの神経心理研究者はこの理論を支持している (安田, 1986; Warrington & McCarthy 1987; Semenza & Zettin, 1988 ; Lucchelli & De Renzi, 1992; McNeil et al., 1994; Hittmair-Delazer et al., 1994)。

反対の立場に立つ理論として、the descript theory of reference は、固有名詞の意味はある対象の明確な記述によりもたらされると論じている。例えば、“Mikhail Gorbachev”の意味は“ソ連に pereistroika を導いた人”と記述される (Valentine et al., 1996 参照)。しかし、この理論は“Mikhail Gorbachev”という同名人物が複数いるという矛盾する事態に行き当たる。もし“Mikhail Gorbachev”が意味をもっているならば、その名前を持つ人すべてが“pereistroika”をおこなわなければならない。このような混乱は神経心理学の文献でも散見する (Cipolotti et al., 1993; Shallice & Kartsounis, 1993; Harris et al., 1995b; Milders et al., 1998)。これは以上のような固有名詞の“無意味性”の説明が、いまだ抽象的で、理解が困難なこととから起きていると思われる。

この混乱を解決するためには、日本の言語学者によって提唱された“本質的属性”と“偶然的属性”という概念からの説明が役に立とう (両角, 1962; 三宅, 1972)。一般名詞は本質的属性によって、適応範囲が限

定された意味をもつ。“山”というのは“勾配がわりあい急で、高度の高い土地” (Webster 1984) という意味があり、富士山、エベレスト、マッターホルンのように“山”に適用される。

一方、ある固有名詞によって指示される特定の対象物は、無限の特性をもつ。例えば、富士山は“日本で一番高い山”、“美しいピラミッド状の形”、“雪に覆われている”などさまざまな属性をもつ。これら無限の属性は、対象物のもつ偶然的属性である。“偶然的”である理由は、例えば富士山は大噴火によりその高さや形が変化する可能性があるからである。一方、本質的属性である“山”は、大噴火しても変わることはない。

偶然的属性はそれぞれの対象に付随するものであるが、固有名詞とその指示対象との間に意味として介在はしない。それゆえ、固有名詞は意味を伴わずに、対象物を直接指示するものである(両角, 1962; 三宅, 1972)。どのような偶然的属性が、無限にある偶然的な属性の中から対象に結び付けられるかは、話し手や聞き手の経験、あるいはその時代に普及している一般的な知識による。the descript theories of reference は本質的属性と偶然的属性を混同した理論である。以上の論点を図 10 に図示した。

(図 10 参照)

社会的な相互交渉において、話し手は聞き手に固有名詞の“shared attributes”を暗示することがしばしばある(例えば、リンカーンと奴隷解放)。しかし、このような状況に依存した“意味”は、言語学における“語義的意味”あるいは一般名詞の“本質的属性”ではない。同じことは、一般名詞から偶然的属性が想像された場合にも言える(e.g. 大統領と暗殺)。

時に、一般名詞から固有名詞への転換が起こる(例: a new castle から Newcastle)。逆の変化も起こりえる(例 Earl of Sandwich から sandwich)。



加えて、“Parisian”, “Machiavellian”のように 固有名詞の形容詞的用法も観察される (Cohen & Faulkner, 1986)。これらの事実に基づき、一般名詞と固有名詞の違いは、質的なものではないと言う研究者もいる。しかし、話し手はこれらの言葉を使う際には、固有と一般名詞の区別に注意を払っている。そのため、両者の違いは質的なものである (両角, 1962)。

しかしながら、ある単語が一般名詞か固有名詞か判断が困難な時がある。この場合には、その単語を他の言語に訳してみるとよい。もし訳が適切であれば、その単語は一般名詞である (Morozumi, 1962)。例えば日本語の“山”は英語で“mountain”と訳される。しかし、“富士山”は“日本で最も高い山”のような偶然的属性を付加する以外、訳せない。固有名詞に関するこれ以上の議論は、文法書に委ねたい。

#### まとめ

この節では、固有名詞の“意味”に関する二つの理論“the theory of direct reference”と“the descript theory of reference”を紹介した。前者は固有名詞は意味をもたず、対象を指し示すだけであるという立場であり、後者は、ある対象の記述により固有名詞に意味がもたらされるという立場である。そこで、“本質的属性”と“偶然的属性”の概念を紹介し、後者の説の誤りを指摘した。